

11. L5 神経根単独障害にみられた Trendelenburg 徴候

— 腰椎椎間板ヘルニアの1例 —

桑原 聡, 新井 洋, 金子真由美
小島重幸 (千大)

Trendelenburg 徴候を主徴とした腰椎椎間板ヘルニアによる L5 神経根単独障害の1例を報告した。症例は54歳女性で、緩徐進行性に歩行時の腰の動揺を呈し、根嚢造影、椎間板造影にて L5 神経根単独の硬膜外での圧迫が証明された。単独神経根障害による同徴候の報告はこれまでになく、この症状の診断的意義を考える上で貴重な症例と思われた。

12. パーキンソン病における Froment の手首固化徴候と Westphal の筋短縮反応に関する1考察

長谷川修, 長友秀樹, 鈴木ゆめ
(横浜市大)
鈴木丈司
(日立戸塚総合・内科)

軽微な錐体外路徴候を検出する方法として、手首固化徴候と筋短縮反応が知られている。しかし、手首固化徴候は対側に随意運動を负荷した際に伸展された筋に筋活動を生じる (rigidity) のに対し、筋短縮反応は短縮された筋に生じる不随意的筋収縮すなわち dystonia の所見を示すものである。軽度のパーキンソン病について調べたところ、上下肢ともに軽い筋短縮反応は生じうるが、対側に随意運動を负荷すると dystonia は減少し、rigidity は増強した。

13. Rocking Belly Movement の1例

篠遠 仁 (県立鶴舞)
桑原 聡 (千大)

メトクロプラミドの長期投与による遅発性ジスキネジアとして、特異な軀幹の不随意運動 “Rocking Belly Movement” をきたした1例を報告した。症例は70歳男性で2年半にわたって胃部不快感のためメトクロプラミドを30mg 連日服用したところ、坐位にて律動的 (約1回/秒) な腰を前に突き出すような不随意運動が出現した。この不随意運動はメトクロプラミドの中止とともにすみやかに消失した。

14. Queckenstedt test の歴史的変遷

山崎正子 (国療千葉東)

Queckenstedt が頸静脈を圧迫して髄液圧の変化をみ

ることにより脊髄圧迫性病変の診断につながることを発表したのは、1916年のことである。その後 electromanometry を使用するに至るまでの歴史的変遷について述べた。千葉大学神経内科で実施している “Dynamic Queckenstedt test” についてその起源を調べるのが目的であったが、見出すことはできなかった。

15. 左大脳半球の血管境界領域に発生した脳梗塞による混合型超皮質性失語の1例

小松隆行 (千大)
福武敏夫 (鹿島労災)
河村 満 (川鉄病院)

混合型超皮質性失語の報告はきわめて少なく、不明な点が多く残されている。われわれは、左大脳半球の血管境界領域に発生した広範な脳梗塞病変による混合型超皮質性失語 (69歳男性) を経験した。MRI では Sylvius 溝周辺の言語領域をほぼ spare した病巣を認めた。脳梗塞により言語野が他の大脳半球から遮断されたことによって、混合型超皮質性失語を呈したことを画像診断上で明らかにすることのできた貴重な症例と思われた。

16. 地誌的障害を伴った純粋失読の1例

中村 勉, 山中 泉, 吉山容正
岩淵 定
(七沢リハビリテーション病院脳血管センター)

69歳、右利き男性。左後頭葉内側部、下側頭葉内側部梗塞により右同名半盲、純粋失語、地誌的失見当、地誌的記憶障害、短期記憶障害を伴った症例を報告した。地誌的障害の出現に海馬が関与していることが考えられた。すなわち、空間認知障害が、左海馬を含む病変によっても引き起こされることが示唆された。

17. Bálint-Holmes 症候群を呈した ADEM: MRI・PET での診断

河村 満 (川鉄病院)
高橋伸佳 (千大)

EBvirus 感染後に、突然の中枢神経症状で発症した ADEM, 44歳男性を報告した。症例の初発症状・主症状は Bálint-Holmes 症候群であった。MRI・PET では、X線 CT で障害の明らかでない早期から両側頭頂後頭側頭葉の白質に著明な異常がみられた。また、ステロイドパルス療法が有効であった。ADEM の早期診断には、MRI・PET が有用で、神経心理学的な視点からの検討も重要であると考えられた。